

令和 2 年 5 月 12 日現在

機関番号：32651

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K12253

研究課題名(和文) 精神障害者が地域生活を送るためのセルフマネジメント評価尺度の開発

研究課題名(英文) Development of self-management evaluation scale for people with mental disability to live in the community

研究代表者

山下 真裕子 (Yamashita, Mayuko)

東京慈恵会医科大学・医学部・准教授

研究者番号：40574611

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：精神障害者が地域生活を継続するために必要なセルフケアに関する中範囲理論を構築し、これを理論基盤とした精神障害者が地域生活を送るためのセルフケア能力評価尺度を開発した。本尺度は、6因子35項目で構成され「生活機能」「社会機能」「心理的側面」を包含し、簡易的かつ多角的に精神障害者のセルフケア能力を定量的に測定できるものである。調査の結果、本尺度の信頼性および内容的妥当性、収束的妥当性、構成概念妥当性を確認できた。またケースコントロールスタディにより本尺度が精神障害者の長期入院を予測できることも確認できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

精神障害者のセルフケア能力を定量的に評価することで、退院後、地域生活を送るために必要な社会資源や支援内容など、具体的な支援策を講じる上で重要な資料となる。また医療者に対し、支援の方向性の新たな道標となり、具体的かつ明確となった課題に対する支援の実施が可能となり、精神障害者のセルフケア向上に寄与できる。精神障害者のセルフケアの向上は、精神障害者自身の生活への主体性、QOLの向上、地域生活の定着の促進、社会的入院の解消、再入院の予防による医療経済的效果が期待できる。

研究成果の概要(英文)：We created a scale proposal based on concept analysis and qualitative research. We conducted a third-party assessment-type questionnaire targeting 191 persons with mental disabilities hospitalized at dedicated mental health hospital and then validated reliability and validity. An exploratory factor analysis resulted in the extraction of six factors and 35 items. We confirmed that the developed scale fulfilled specific standards for reliability and validity, and that the scale would be used to simply and adequately assess self-care competence among persons with mental disabilities.

研究分野：精神看護学

キーワード：精神障害者 セルフケア 地域支援 尺度

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

医療費の高騰を背景に、慢性疾患の疾病管理(Disease Management)の重要性が指摘されている。Disease Management の重要な構成要素としてセルフマネジメント教育がある。1980年代後半にスタンフォード大学で開発された、慢性疾患セルフ・マネジメントプログラム(CDSMP)は、現在世界 22 カ国で慢性疾患の患者・家族に提供されている。本プログラムの実施により、QOL の向上、健康習慣の改善、自己効力感の向上など多くの効果を認めている。わが国でも近年、慢性疾患に位置付けられる精神疾患患者を対象に実施され、セルフマネジメントの改善が報告されている。セルフマネジメントを評価する指標として、セルフケア行動評価尺度(SDSCA)、セルフマネジメント自己管理スキル尺度(SMS)など多くの尺度が開発されている。しかし一般の人々を対象とした指標を精神障害者に使用した場合、センシティブではないと報告されており、精神障害者に特異的な指標が有用である。一方精神障害者を対象とした指標は社会生活評価尺度(LASMI)、精神障害者生活機能評価尺度、Mental Health related Selfcare Agency scale(MH-SCA)、Illness Management and Recovery Scale(IMRS)などセルフマネジメントに関連した指標が散見される。

ここでセルフマネジメントとセルフケア概念について整理した。医療において、セルフマネジメントという語は、人の行動には意識的、無意識的に関わらず意味があり、過去の経験から意思決定するという認知理論に基づき操作的に用いられている。そしてセルフマネジメントは、疾患を管理したり、健康な習慣を通して健康を維持するセルフケアの要素の一つであり、疾患の症状や兆候に対する反応としての認知的な意思決定のプロセスとされることが明確になった。つまり、セルフケアが健康や病気どちらの状態においてもなされる当事者自身による認知と行動を含む広範囲な概念を指すのに対し、セルフマネジメントはセルフケアの一要素であり、健康や病気の状態における生活管理に関する認知的自己決定のプロセスを強調する限定的な概念である点で区別されている。しかし、看護学の辞書において、自己管理は self-care と訳されていること、セルフマネジメントがセルフケアとも互いに言い換えられる概念とされていることなどから、セルフケアはセルフマネジメントを包含したより広い概念であるが、明確に区別して使用されていないことが推察された。そこで本研究ではセルフケア概念に焦点を当てた。近年、精神障害者が地域生活を送るためのセルフケアとして症状管理、服薬管理、生活時間の管理、金銭管理、他者交流、経済基盤の確保、サービスの活用、動悸づけ、問題解決、意思決定、自己効力感など複数の能力・機能が明らかになってきている。しかし既存の指標では、セルフケアのうち生活機能や社会機能、心理的側面など一側面の評価に留まり、セルフケア概念を包括した指標は現在国内外において見当たらない。近年、精神障害者の地域移行支援は国の施策として実施されている。しかしセルフケアを適切に評価せず、症状の改善を主要な指標として地域移行を促進することは、退院後、セルフケア能力に応じた社会資源の活用や支援内容が十分検討できない。さらに不十分なセルフケアや支援により症状の再燃を来し、入退院を繰り返す回転ドア現象の派生を余儀なくさせる。今後ますます精神障害者の地域移行が進む中、セルフケアへの支援は重要であり、そのためには、簡易かつ包括的に評価する指標は必要不可欠である。

2. 研究の目的

本研究では、精神障害者のセルフケア能力に関する中範囲理論を構築し、これを理論基盤としたセルフケア評価尺度を開発する。

3. 研究の方法

1) 精神障害者のセルフケア能力に関する中範囲理論の仮説の構築

(1) 国内外のセルフケアに関連した著書・文献および既存尺度の検討

精神障害者および慢性疾患患者のセルフケア，必要な能力等に関する書籍・文献のレビュー，および既存の尺度の構成因子を検討し精神障害者のセルフケア能力の構成要素を抽出した。

(2) 地域で暮らす精神障害者のインタビュー

地域生活を送る精神障害者に，地域生活を送る上で必要と認識するセルフケア能力についてのインタビューを行った。就労継続支援 B 型事業所に通う疾患や重症度，年齢や生活状況の異なる精神障害者に「地域生活を送る上で必要と考える能力について」1 時間程度の半構造化面接を行った。面接内容は IC レコーダーに録音し，逐語録を起こした。クリップendorf の内容分析手法を参考に分析を行いセルフケア能力の構成要素を抽出した。

(3) 地域支援を行う訪問看護師，精神保健福祉士，医師へのヒアリング

地域で精神障害者を支援する訪問看護師，精神保健福祉士，医師を含めた有識者会議を設け，「精神障害者が地域生活を送る上で必要と考えるセルフケア能力について」ヒアリングを行った。内容は IC レコーダーに録音し，逐語録を起こした。クリップendorf の内容分析手法を参考に分析を行いセルフケア能力の構成要素を抽出した。

(4) 中範囲理論の仮説の構築

(1)(2)(3) の結果，抽出された構成要素について，共通性，類似性，関連性等をもとに分類し，カテゴリーを形成し，中範囲理論の仮説を構築した。

2) 中範囲理論の仮説の検討および尺度の作成および信頼性・妥当性の検証

(1) 精神障害者のセルフケアに関する中範囲理論の仮説の検討

精神障害者への支援について，多くの知識・経験を有する多職種で構成された有識者会議を複数回行い，構築した中範囲理論の仮説について検討を重ねた。

(2) セルフケア尺度の作成

(1) で構築した中範囲理論を基に，概念的特性を測定する質問項目を作成する。再度有識者会議を設け，文言，表現の適切性，作成した尺度の内容的妥当性を検証した。

(3) 作成した尺度の信頼性・妥当性の検証

地域活動支援センターおよび就労継続支援 B 型事業所に通う精神障害者を対象に他者評価式質問紙調査を実施し，作成した尺度の信頼性及び構成概念妥当性の検討を行った。さらにケースコントロールスタディを行い，本尺度におけるセルフマネジメント能力の弁別可能性を検証した。

4. 研究成果

1) 精神障害者のセルフケア能力に関する中範囲理論の仮説の構築

精神障害者のセルフケアに関する中範囲理論の仮説を構築するために 4 段階で構成された。第 1 段階は，国内外のセルフケアに関連した著書・文献 42 件を抽出した。その後 Rodgers の概念分析の手法を用いて概念分析を行い，精神障害者に必要なセルフケアの概念は「生活の基礎をつくる」，「生活を営む」，「生活の質の充実」の 3 つの要素で構成された。また精神障害者のセルフケアを「心身の健康状態の維持・向上，自己概念の変化，社会参加，地域生活の継続による QOL の向上を導くために，生活の基礎を作り，生活を営み，生活の質を充実させるための行動」と定義できた。

第 2 段階は，地域で暮らす精神障害者 15 名を対象にインタビューを行った。その結果精神障

害者が認識する地域で暮らすために必要な要素は【人と繋がる力・関係を維持する力】【人的資源】【管理能力】【社会資源の活用】【援助要請行動】【生活を楽しむ能力】の6要素が抽出された。

第3段階は、地域支援を行う専門職を対象にインタビューを行った。地域で精神障害者を支援する訪問看護師9名、精神保健福祉士3名に対して半構造化面接を行った結果、精神障害者が地域で暮らすために【日常生活の維持】【対人関係の維持・構築】【精神・身体状態の安定を図る】【社会資源の活用】【エンパワメント】【受援力】【生きがい】の7要素が抽出された。

第4段階は、これらの結果を統合し、精神障害者のセルフケアの中範囲理論の仮説を構築できた。

2) 中範囲理論の仮説の検討および尺度の作成および信頼性・妥当性の検証

1) の中範囲理論から精神障害者のセルフケアとして「生活機能」「社会機能」「心理的側面」の3要素が明らかになった。またSDSCA, SMS, LASMI, 精神障害者生活機能評価尺度, MH-SCAなどを参考にして質問項目を作成した。その後、内容妥当性確保のため、精神科訪問看護を行う看護師、地域移行支援を行う看護師、精神科医師、尺度開発に精通した精神看護学を専門とする研究者に質問内容の妥当性、過不足について聞き取り調査を行い、最終的に50項目からなる「精神障害者のセルフケア能力評価尺度」の原案を作成した。各質問項目は6件法のリッカートスケールとし、「5:常に出来る」「4:かなり出来る」「3:どちらかという出来る」「2:どちらかという出来ない」「1:かなり出来ない」「0:常に出来ない」で点数化した。なお、本尺度は急性期から回復期のあらゆる病期にある入院患者に対して評価可能な尺度として活用することを目指した。病期や認知機能障害等の症状により、自己の状態を客観的かつ適切に評価することが困難な場合を考慮し、他者評価式尺度として作成した。

191名を対象に他者評価式の質問紙調査を実施し、信頼性と妥当性を検証した。探索的因子分析の結果、7因子51項目が抽出され、第1因子から順に【自己の生活・健康の主体的管理】【遵守・管理・調整・協働による疾病管理】【対人関係の構築・維持・深化のためのソーシャルスキル】【自身や生活環境の調整】【well-being】【時間デザイン】【睡眠・休息の調整】と命名した。信頼性係数は、尺度全体のCronbach'係数が.974であった。基準関連妥当性はRehabとの相関係数が $r=-.75$ であった。累積入院期間の中央値を基準に長期入院群、短期入院群に分けて本尺度の合計得点の平均値を比較した結果、短期入院群は有意に本尺度得点が高い結果であった。以上より、本尺度の信頼性、妥当性は一定の基準を満たし、生活機能、社会機能、心理的側面を多角的に評価できる尺度であることを確認した。またケースコントロールスタディより弁別妥当性を認める尺度であり、精神障害者の長期入院を予測するツールとして、また支援計画立案の資料として、臨床の場面で用いるのに有用な尺度であることが示唆された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Mayuko Yamashita	4. 巻 2
2. 論文標題 Theory of Self-Care for People with Mental Disability in a Community	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 HSOA Journal of Practical and Professional Nursing	6. 最初と最後の頁 2-6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24966/PPN-5681/100003	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 山下真裕子 藪田歩 伊関敏男	4. 巻 27
2. 論文標題 地域定着支援を実施する支援者の認識する精神障がい者が地域で暮らすために必要な要素	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本精神保健看護学会誌	6. 最初と最後の頁 82-90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 山下真裕子	4. 巻 37
2. 論文標題 精神障がい者の地域生活におけるセルフケアの概念分析	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本看護科学会誌	6. 最初と最後の頁 209-215
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.5630/jans.37.209	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 山下真裕子 伊関敏男 藪田歩	4. 巻 42(2)
2. 論文標題 地域で暮らす精神障がい者の服薬の必要性の認識と服薬における課題	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本看護研究学会誌	6. 最初と最後の頁 129-136
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.15065/jjsnr.20161127007	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山下真裕子 伊関敏男 藪田歩	4. 巻 25(1)
2. 論文標題 地域で暮らす精神障がい者の訪問看護師による服薬支援の現状と課題	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 日本精神保健看護学会誌	6. 最初と最後の頁 99-107
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 山下真裕子
2. 発表標題 地域で暮らす精神障がい者が認識する地域生活に必要な要素
3. 学会等名 日本看護科学学会学術集会第38回
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山下真裕子 伊関敏男 藪田歩
2. 発表標題 精神障がい者が地域生活を送るために必要なセルフケアの概念分析
3. 学会等名 第43回日本看護研究学会学術集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 山下真裕子 伊関敏男 藪田歩
2. 発表標題 精神障がい者のニーズを取り入れた服薬における遠隔看護支援システムの開発
3. 学会等名 日本看護研究学会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 山下真裕子
2. 発表標題 精神障がい者の服薬に関する遠隔看護支援システムの評価
3. 学会等名 日本看護科学学会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 山下真裕子 伊関敏男 藪田歩
2. 発表標題 地域で暮らす精神障がい者の服薬に関する現状
3. 学会等名 日本精神保健看護学会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>東京慈恵会医科大学ホームページ http://www.jikei.ac.jp/univ/nurse/edu/e_moral_w.html</p>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	伊関 敏男 (Iseki Toshio) (30325922)	神奈川県立保健福祉大学・保健福祉学部・准教授 (22702)	

